2026/9/25　第２００回読書会

「一次元の挿し木　Labyrinth of Hortensia and the Minotaur」

松下龍之介　宝島社文庫

担当　加賀谷亜矢(S62 仏文)

作者・作品について

松下龍之介　1991 年東京都江戸川区生まれ　茨城県牛久市在住
千葉工業大学大学院工学研究科修士課程修了　会社員(火力発電所や製鉄所向け高圧ポンプの設計、技術提案)
2020 年頃から、仕事の傍ら執筆を始める。本作は文学賞への応募 3 作目にしてデビュー作
(2025 年『第 23 回このミステリーがすごい！』大賞・文庫グランプリ受賞)
7/5 より 9/6 日本テレビでドラマ化。

◆web 別冊文芸春秋 2025/4、REAL SOUND2025/5、メクリメクル 2026/6 インタビュー記事より
ミステリーの賞への応募は初めて。海外ミステリーが好きで特に「緋色の記憶」で知られるトマス H クックに影響を受けている。(過去と現在を行き来する書き方も)
<本作の着想> ヒマラヤのループクンド湖に遺る約 800 体の人骨の最新 DNA 解析がされたというナショナル・ジオグラフィックの記事(2019/9 日経新聞に掲載)に得た。古人骨の DNA が失踪した妹のものと一致したという物語を思いつくが、遺伝子学は専門外のため 3 年間をかけて徹底的にリサーチ、以前新興宗教について執筆を試みた際(未完成)宗教について勉強した事も活かしている。
<執筆に当たって目指したのは> 「とにかく面白いと感じてもらうこと」。冗長な文章を避け、主人公を動かしスピーディーな展開を心がけた。
<登場人物を作る時に意識したのは> 対比。作品のテーマの一つに「生まれか育ちか」があるが、主人公の七瀬悠と七瀬紫陽は生まれにおいての対比を意識した。また、物語に緊張感を与える牛尾に対し、コメディーリリーフ的存在の石見崎唯。ちなみに、唯には普段から自分が思っていることを言わせている。
<題名について> 自身が執筆の過程で(遺伝子は)「一次元の文字列」(p250)という言葉と「挿し木」という言葉が印象に残り組み合わせた結果。(「ループクンドの人骨」を変更)

あらすじ

この物語は、プロローグとして 24 年前の出来事、エピローグとして 4 年後の様子があり、その間に、主人公が行方不明の妹を捜し出す顛末が描かれます。
その捜索劇は 20 日間あまりのことですが、過去と現在が短いスパンで行ったり来たりし、また舞台も東京、茨城県日江市（架空の都市）と入れ替わるので、少し忙しなく混乱を生じやすい印象がありました。
そこで例会では、時系列順に出来事を並べて振り返りました。

① 24 年前

新興宗教「樹木の会」の後継者とする目的で、ヒマラヤのループクンド湖に残る古人骨からクローンを作るという、極秘プロジェクトが始動。日江製薬次期社長の七瀬京一と部下の石見崎明彦、分子生物学者の仙波佳代子が、200 年前の少女の人骨を発掘する。

② 現在

大学院生七瀬悠（はるか）は、4 年前行方不明になった義妹、紫陽（しはる）を捜し続けている。紫陽は七瀬京一の娘で、悠の母が京一と再婚したため兄妹になった。体の弱い紫陽は学校にも通えなかったが、聡明で美しい。二歳違いの二人は、兄妹の域を越え好き合っていた。

ある日、悠は所属する遺伝人類学教室の石見崎明彦教授（日江製薬を辞職後転身）から古人骨の DNA 鑑定を依頼される。すると、それは紫陽の DNA と完全に一致した。衝撃を受けた悠は教授の自宅を訪ねるが、教授は何者かに殺されていた。

謎を追う悠に、石見崎唯（ゆい）という相棒が出来る。唯は石見崎教授の姪と名乗り、教授の葬儀後、教授の娘真理がいなくなったので捜していると言う。二人はお互いのため協力し合うことになった。

東邦ジャーナルの記者平間からも情報を得た二人は、仙波佳代子という科学者の関与を突き止める。しかし、仙波や謎の男「牛尾」からの警告、平間の殺害により、悠は自分達の身の危険を感じ紫陽の捜索を断念。

唯との協力関係も解消した所に、刑事から、石見崎の娘真理は叔父の家で無事に暮らしていること、そして紫陽という女性には戸籍がないことを聞かされる。さらには、唯という女性は数年前事故死したと判明する。

事態が飲み込めない悠は、紫陽と暮らした日江市の家に行く。亡くなった母の手紙を発見すると、そこには紫陽を産めたことを誇りに思うとあった。さらに混迷を深めた悠が紫陽との思い出の場所、山城美術館に行くと、挿し木された紫陽花が咲き乱れている。

かつて紫陽はそれを見て、自分と同じだ、親しみがわくと言った。その思い出が蘇り、悠は全てを理解する。紫陽は古人骨の「挿し木」(=クローンを意味する）なのだと。
その後悠は、京一、仙波佳代子、唯からそれぞれの告白を聞き、真相が明らかになる。

○24 年前、神秘の湖から聖母を作りたい「樹木の会」、日江製薬代表の父に認められたい京一、研究成果を上げたい仙波が手を組んだこと。仙波が古人骨から人工胚の作成に成功、悠の母を代理母にして移植し、誕生したのが紫陽だということ。

◯プロジェクトの頓挫により、紫陽は京一と石見崎が秘密裡に育て、「樹木の会」の手に渡らなかったこと。遺伝子によりとても体の弱い紫陽に、ずっと治療を続けて来たこと。

◯経営不振に陥った日江製薬に中国企業からの買収計画が持ち上がっており、過去のプロジェクトが世に出る恐れがあること。その痕跡を全て消そうとする「樹木の会」教祖のクローン「牛尾」に、紫陽も狙われていること。

○紫陽は、病が進行し美しさや聡明さを失うのを悠に見られたくない思いから、自ら姿を消したこと。その後石見崎教授の家に暮らし、実は教授の娘真理である唯が紫陽の面倒を見ていたこと。二人は親友になったこと。「牛尾」の魔の手が迫り、殺害される直前教授が真理に黙って紫陽を京一のもとに預けていたこと。

そのように謎は解けたものの、悠は京一が美術館に隠した紫陽と真理を、すぐに救出し「牛尾」から守らねばならない。病気が進行し衰弱し切った紫陽は、意識も失っている。

救出劇は、挿し木の紫陽花が咲き乱れる山城美術館をクローンの迷宮に、「牛尾」を迷宮に潜む怪物ミノタウロスに見立て、繰り広げられる。遺伝子により凶暴性を持った「牛尾」の猛攻に追い詰められる悠だが、紫陽の守り刀によって「牛尾」を倒す。
守り刀は、京一の治療の効き目が出て意識を取り戻した紫陽が、悠に投げたのだった。

だが紫陽はそのままいなくなってしまう。

③ 4 年後

巨大組織「樹木の会」の陰の力が働いたのか、一連の事件は未解決のまま風化していた。事件をともに乗り切った悠と真理（唯）は焼失した山城美術館を再建し、その落成式を、紫陽が遠くから見守っている。

紫陽は「牛尾」がこと切れたのを見届けた後、自ら「樹木の会」の聖母となり、二人の前から姿を消す道を選んだ。その地位により愛する二人を守ろうという決意からだった。

感想

以下は、例会で私があげた感想です。

◯文章が読みやすい。「迷宮」や「知的な人の言葉を借りれば～」という言葉、牛尾の異様な姿を繰り返し登場させ物語を引っ張っていた。遺伝子解析の説明も分かりやすい。
◯科学者の言葉の引用、映画の使われ方が上手かった。
・「”協力“はヒトが備えた強大な能力であり～生き延びるだけでなく、ほぼあらゆる環境で繁栄してきた理由でもある」進化生物学者ニコラ・ライハニ(p90)
・「我々はみな、遺伝子という名の利己的な分子に操縦された乗り物に過ぎない」進化生物学者リチャード・ドーキンス(p100)
・映画「ガタカ」 遺伝子の優劣で社会的地位が決まるディストピアを描く(p94、p106)
◯収束の仕方がファンタジー過ぎる。ただ紫陽が二人の愛した人間たちの幸せな様子を見て、経緯はどうあれこの世に生を受けたことに喜びを感じるというラストは良かった。

◆山城について
物語の舞台日江市は茨城県北部にあるとされる架空の都市だが、戦国時代、常陸国(現在の茨城県)北部に佐竹氏の拠点、久米城があった。中世山城の基本技術が詰まっており、土塁、堀切、搦手、帯曲輪などの名残があり、山城公園のモデルかと思われる。(p20、p352~353)

◆作者のテーマ「生まれか育ちか」、また対比ということについてー牛尾と紫陽
牛尾　「人を形成するのは『生まれ』か『育ち』か～私は『生まれ』がすべてだと思う。遺伝子がその者の運命のすべてを定める。」「ただ理解してほしいだけだ。『私がこうなったのは私のせいではない』とね。」(P295)
紫陽　「抗ってほしいのかも～遺伝子に」(p152)「そう遺伝子で決められていてね。～何も

怖がることはないよ。ただ、理解すればいいだけ」(p325)
同じクローンという存在で、凶暴性ゆえに社会から隔離され、生まれを呪い続けた牛尾と、周囲の人間に守られ、生まれに抗おうとした紫陽に対比を感じる。

◆作者が唯に言わせているという言葉について
「誰にでも、本当の意味で自分の人生を生きる時期が必ずどこかで訪れる〜」(p323)など？それぞれ孤独を抱えていた悠と唯にとって、紫陽と共に過ごした時間がいかに意味深かったかを表す言葉だと思うが、メッセージ性の強い表現だと感じた。

◆ドラマについて
山田涼介が、絶望の底に居る超美少年、悠役にぴったり。京一の側近前原は p78、樹木の会広報の春日は p63、「新明阿」の香島は p41 に登場する人物？黛刑事を信者にしたのは p69〜70 のエピソードから？黛が牛尾に紫陽を殺そうとするのは嫉妬からかと尋ねたり、牛尾が死に際自分は何のために生まれて来たのかと呟いたりするのは、解釈として良いと思う。

次に、例会を終えて思ったことです。

ドラマが本を補完している、というご感想がありました。先に「ドラマについて」であげましたが、本ではほとんどセリフがなかったり、登場しても名も無かったりする人物に、ドラマでは大きな役柄を与え、色々なことを語らせます。
また、本には描かれないクローン作成の日々や、七瀬京一と悠の母の再婚後の様子が、ドラマでは詳しく描写されていました。
本からは、なぜ樹木の会の「牛尾」が聖母となる紫陽をつけ狙うのか、なぜ京一が紫陽を守り抜こうとしたのかが今一つわかりませんが、それらを見ると、紫陽への嫉妬があったからという一つの解釈が出来たり、また京一にとって悠の母への愛情がどれほど深かったかが伝わってきたりします。
それが作者の意図した解釈かはわかりませんが、本でも心理描写が必要な部分だったと思いました。そうでないと、別のご感想にあったように、紫陽が無事聖母となり、その道筋で色々な人が振り回される、という物語になりかねないと思います。
一方、科学者仙波佳代子の研究への情熱はとてもよく描かれていたと感じます。理系大学院出身であることや、この本のためのリサーチが、よく生きていると思いました。また悠と唯の、恋愛とは少し違う絆のようなものも、場面を追うごとに無理なく描かれていきました。

事件の背景にもう少し説明が欲しかったものの、古人骨と行方不明の妹の DNA が一致という謎自体が面白く、緊迫感のある展開を楽しめる物語でした。